

櫛形町文化財調査報告 No-10

柿平土地区画整理事業地内試掘調査報告

1993

櫛形町教育委員会

序文

櫛形町は、峠西地方の中央に位置し、櫛形山の山麓に発達した町であります。2万年以上まえから人々の生活が始まり、以来長い歴史の中で常に峠西地方の中心として栄えてきました。

本町「小笠原」は平安時代から鎌倉時代にかけて小笠原氏の始祖《小笠原長清公》が館を構えたところといわれています。

今回櫛形町では、町の総合的な都市計画の中で、地域の整備と健全な市街地の造成と供給をおこなう事を目的として、本町の中心市街地に隣接する小笠原字柿平を中心とする地域 27.6haについて、「峠西都市計画事業 櫛形町柿平土地区画整理事業」を計画しました。

ところがたまたま、事業予定地内には6ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、また東には近接して「小笠原長清館跡」に指定されている小笠原小学校が存在しています。そのため、櫛形町教育委員会では、事業実施に先だって埋蔵文化財の保護と、あわせて事業の円滑な実施をはかるために、今回国・県の補助を頂き、区画整理事業地区における遺跡（遺構）の所在・規模等を確認するための調査を実施いたしました。この調査の結果が、上記の目的達成のため意義ある資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、快く耕作地への立ち入りをお許しいただいた地権者のみなさまをはじめとして、調査にご指導・ご協力いただいた多くの方々に深く感謝の意を表するとともに、今後ともさらにご協力いただきますようお願い申し上げます。

平成5年3月-----

櫛形町教育委員会

教育長 沢 登 孝 弘

目 次

序 文

例 言

～插 図 目 次～

I 調査の目的と方法	1	第1図 柿平地区土地区画整理事業総合現況図	1
1. 調査の目的と経緯	1	第2図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	2
2. 調査の方法と経過	1	第3図 主要レーダー測線配置図	4
II 遺跡の概観	2	第4図 レーダー調査結果図	4
III 調査の成果	3	第5図 遺跡地形図及び試掘状況図	5
1. 物理探査（地中レーダー）の方法と成果	3	第6図 試掘グリッド配置図	5
2. 試掘調査の方法と成果	3	第7図 主要グリッド平・断面概念図	6
3. 出土遺物	7	第8図 出土遺物	7
IVまとめ	7		
V 引用・参考文献	7		

例 言

1. 本書は、平成4年度に実施した「駿河都市計画事業 櫛形町柿平地区区画整理事業」地内における試掘調査の報告書である。

2. 遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原に所在する。

3. 調査は、平成4年度文化財保存事業として、国・県の補助金をえておこなった。

4. 調査を実施した年月日は下記の通りである。

 地中レーダー調査 平成4年12月11日～同月19日

 試掘調査 平成5年1月20日～2月27日

 整理作業 平成5年3月8日～同月31日

5. 調査組織は以下の通りである。

 調査主体 櫛形町教育委員会

 調査担当 清水 博（櫛形町教育委員会）

 地中レーダー調査 渡辺広勝（テラ・インフォメーション・エンジニアリング）

6. 調査参加者

発掘調査	相川はるみ	相川みさえ	井上 和美	井上ことじ	井上千恵子	井上 巴江
	井上ひき江	入倉 妙子	入倉とら江	海野 長雄	大森 武雄	小野 嘉雄
	乙黒さつき	川崎しげみ	河住 照雄	小林 操	桜田 定子	桜田みさえ
	桜林 昭吾	佐塙 金作	佐藤 澄子	鳴津しづ江	杉山美恵子	時田 わか
	長沼 肇子	由井 伴三				
整理作業	甘利千恵子	石川 千年	石原 史	神田久美子	鈴木 謙子	深沢真由美
	古郡フミ子	山路 宏美	土井みさほ	若林 初美		

7. 本報告書作成の業務分担は下記の通りである。

 原稿執筆 清水、遺物実測・図版作成 若林

 第Ⅲ章第1節については、渡辺が作成したレポートにもとづき清水がまとめたもので、遗漏・誤り等は清水の責任である。

8. 調査及び本書作成にあたり下記の方々からご指導、ご助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

 長沢宏昌・小野正文（山梨県教育委員会文化課）、新津 健・中山誠二（山梨県埋蔵文化財センター）、信藤祐仁（甲府市教育委員会）、山路恭之助（須玉町教育委員会）

I 調査の目的と方法

1. 調査の目的と経緯

檍形町では、本町の中心市街地に隣接する小笠原字柿平を中心とする地域（第1図）について、本来あるべき機能を有する居住空間を創設するために、都市計画との整合を図りつつ、健全な市街地の造成と供給を行う事を目的として土地区画整理事業を計画した。同事業は名称を「峠西都市計画事業 檍形町柿平地区区画整理事業」とし、平成4年6月13日に設立された「檍形町柿平地区区画整理組合」を事業施工者として、平成5年秋に着工し同11年春の完成をめざして行われる事となった。その対象面積は27.6haにおよび、檍形町小笠原字柿平（一部）、同字一ノ出しの一部、大字上宮地字牧野の一部及び大字桃園字西原の一部を含むものである。

ところで、同事業予定地内には6ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており¹、その一部ではかつて試掘調査が実施され²若干の土器片が出土している。また予定地東には「小笠原長清館跡」に比定されている³小笠原小学校が存在し、その一部は試掘調査⁴が行われている。そのため、檍形町と檍形町教育委員会では事業実施に先だって事業地内における遺跡（遺構）の所在・規模等を確認するための調査を実施することとした。

なお、調査は国・県の平成4年度文化財保存事業補助金をえておこなった。

2. 調査の方法と経過

調査は、物理探査法—地中レーダー調査と試掘調査を併用して行った。

レーダー測線は包蔵地の集中する事業予定地東半部を中心に設定し、西半部では主として地形的特徴を観察するための測線を設定した。測線は総延長4.2kmに及んだ。（第6図）

試掘グリッドは、包蔵地及び周辺部を主として配置し、地中レーダーの結果何らかの反応を得た地点にも設定した。グリッドは80ヶ所、400m²に達した。（第6図）

試掘グリッド、レーダー測線共に耕作物との関係から当初の予定を変更した部分があった。

現地調査は、平成4年12月に開始し、平成5年2月末に終了した。整理作業は3月31日まで行った。



II 遺跡の概観 (第2図)

柳形町は甲府盆地の西縁に位置し、西半部は町名の由来となった柳形山とその前面に発達した市之瀬台地が占め、東半部の盆地床縁辺は柳形山から流れ降った諸河川が形成した扇状地となっている。

事業予定地は深沢川の形成した小扇状地とほぼ重複し、西端部は深沢川の谷出口となっている。北側は盆地床へ流れ出た後、急激に北に湾曲する深沢川に面されている。東・南方向は扇端部へ向かい緩やかに降っているが、柳形町の中心市街地である「小笠原」が東に隣接している。該地の標高は300m～340mを測り、東へ傾斜している。特に西半部ではやや急傾斜を示すが、316mの等高線付近から穏やかな傾斜となる。当該扇状地内では、微地形的に幾条かの谷部が認められるが、これは現河道確定前の旧河道の痕跡とおもわれる。

柳形町内には240ヶ所を上回る埋蔵文化財包蔵地が確認されている。町内西半部を占める市之瀬台地上では绳文時代から弥生時代に至る遺跡が豊富に存在している。台地先端部には数基の前期古墳が築造されているが、古墳時代になると遺跡の中心は盆地床に移行する。さらに平安時代以降には町内全域に遺跡は拡散する。事業予定地周辺にも10数ヶ所が存在している。これらは弥生時代から近世にかけての遺物が認められる散布地であるが、主なる時代は中世から近世にかけてのものである。それらの内、柿平A・B、善徳院横遺跡に付いてはごく一部に試掘調査が実施⁶され、中・近世の遺物が得られている。また東に接する小笠原字御所庭には小笠原氏の祖、小笠原長清公館跡が存在したと伝えられ、御所庭・的場等の字名が残されている。現在は町立小笠原小学校が建てられているが、町史跡に指定されている。今回の調査でも、中世の館跡に関係する遺跡の確認が期待された。



- | | | | | | |
|-------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 耕物開墾遺跡 | 2. ノ木遺跡 | 3. 川上道下遺跡 | 4. 物見塚古墳 | 5. 古屋敷遺跡 | 6. 下杉本八遺跡 |
| 7. 六科丘遺跡 | 8. 六科丘古墳 | 9. 長田口A遺跡 | 10. 御船 | 11. 郡崎古墳 | 12. 田頭B遺跡 |
| 13. 神明A遺跡 | 14. 北峯A遺跡 | 15. 曽根遺跡 | 16. 柿平F遺跡 | 17. 辻遺跡 | 18. 若宮遺跡 |
| 19. 御所庭西C遺跡 | 20. 小笠原氏館(伝) | 21. 両所庭西B遺跡 | 22. 御所庭西A遺跡 | 23. 柿平E遺跡 | 24. 柿平B遺跡 |
| 25. 柿平D遺跡 | 26. 柿平C遺跡 | 27. 一の出し堤 | 28. 二の出し遺跡 | 29. 柿平A遺跡 | 30. 水上遺跡 |
| 31. 西原B遺跡 | 32. 七ヶ内遺跡 | 33. 豊小学校遺跡 | 34. 十五所遺跡 | 35. 村前東A遺跡 | 36. 新居道下遺跡 |
| 37. 二本柳遺跡 | 38. 向河原遺跡 | 39. 油田遺跡 | 40. 中川田遺跡 | 41. 大師東丹保遺跡 | 42. 宮沢・中村遺跡 |
| 43. 柳城跡 | | | | | |

第2図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図

III 調査の成果

調査は、物理探査法一地中レーダー調査と試掘調査を併用して行った。試掘グリッド、レーダー測線共に耕作物との関係から当初の予定を変更あるいは割愛せざるをえない部分があった。

1. 物理探査（地中レーダー）の方法と成果（第3・4図）

前述したように、事業予定地内には、6ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が東半部に片寄って確認されていた。そのためレーダー測線は包蔵地の集中する事業予定地東半部を中心に設定し、西半部では主として地形的特徴を観察するための測線を設定した。地中レーダーは、埋蔵文化財の存在有無を把握するとともに、試掘地点の選択・発掘計画の参考とした。

レーダー調査の結果、明確に造構として捉えられたものは数本の溝状造構のみであった。

事業予定地全体に礫土の流積状況が認められた。南半部では、全体に地表面に現れた礫も大きく、地表の起伏も有り、地中の礫も厚く堆積している。北半部中央にも比較的大きな礫層のデータが見られ、いずれも北西から南東方向に流路を発達させている。この二つの礫層帯の中央に、流路と同じ方向で平担面を示す地層が断続的に存在し、全体として一種の舌状地形を示している。

現神山橋付近を谷出口とする古代深沢川は、1に示す方向に主たる流れをつくり、比較的深い流れをつくったと見られる。この流れは氾濫堆積を繰り返し神山橋付近では河川の出口という特質のため、4の自然堤防を形成した。そのため流れは、2の方向に移動し1のルートは河川跡の低地・礫原としてのこる。2方向の流れは、5の方向に河川を発達させるが扇状地堆積の発達に伴い、3方向に移動する。しかし3のルートも5方向に流れるため5付近の微高地を発達させる。そのため3→5ルートの両側の旧2ルートは自然堤防の低い微高地を形成した。そのため旧1ルートは再度、低地として流路となったものと考えられる。

2. 試掘調査の成果（第5・6・7図）

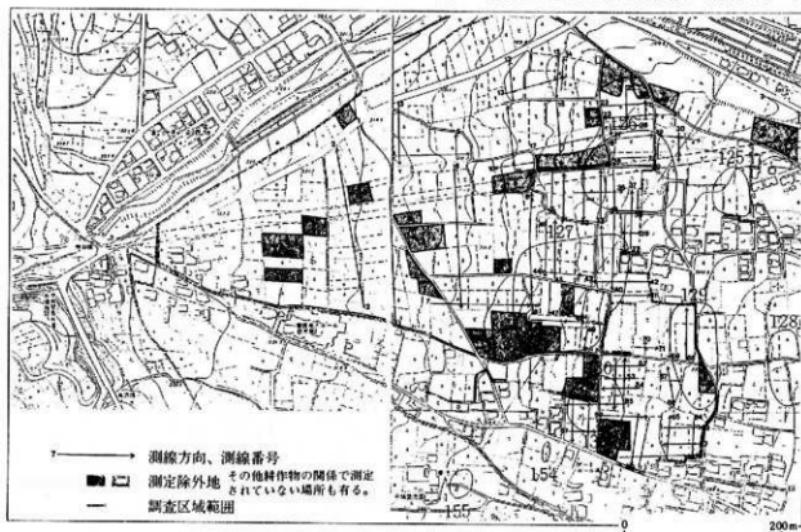
試掘グリッドは、包蔵地を中心として配置したが、地中レーダーの結果をも参考とした。グリッドの規模は、基本的に $2 \times 2\text{m}$ 或いは $3 \times 3\text{m}$ としたが、果物の状況等により部分的には $1 \times 3\text{m}$ とした。試掘調査は重機と人力とを併用したが、耕作状況により重機を使用したグリッドはごく一部分であった。掘削の深さは、レーダー調査の結果から、1.3mから1.5mとした。前記した平坦面がその深さで確認されたことによっている。

試掘の結果、13ヶ所のグリッドで溝状の落ち込みを確認した。C区-G3、D区-G8、K区-G1・G2・G7では耕作土直下からおちこんでいた。内部はいずれも挙大から指頭大の礫層が互層をなして堆積していた。E区-G5、I区-G1、M区-G2・G4・G5では地表下50~100cmで観察された(明)茶褐色土層を切って落ち込んでいた。D区-G1では地表下80cmの砂礫層をきって存在する。

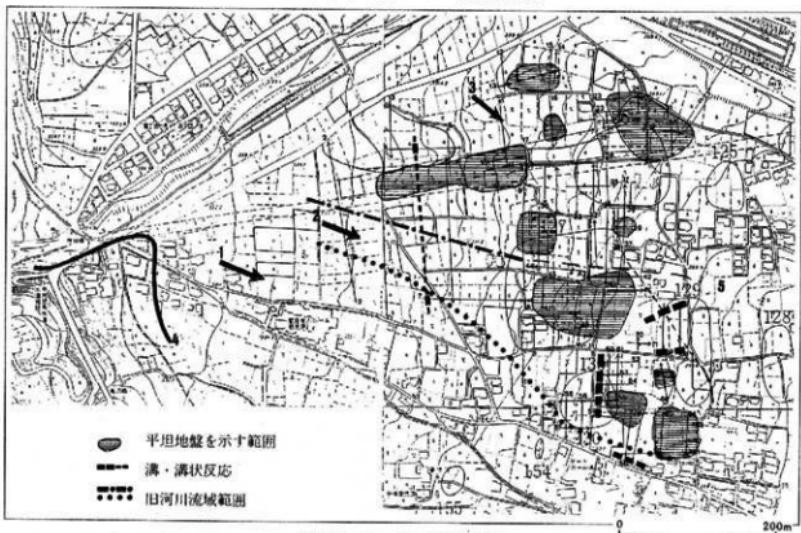
C区-G3、D区-G8で検出したものは、幅・深さとも50cm程だが礫層中にきりこんでいるためか、プラン、壁の確認は困難であった。K区のものは、深さは50~80cm程であったが幅は1.5m以上を測るものである。含疊茶褐色土を切り、挙大~人頭大の礫が充填している。E区-G5では幅80cm深さ30cmのものが南北方向に認められ、砂疊層が覆土となる。I区-G1は掘り込み面が地表下110cmとかなり深いレベルで検出されたもので、幅・深さとも40cmほどのものである。グリッド中央で90°にわかれている。M区-G2・G4・G5で検出されたものは深さ110cm以上幅は1mをこえるものとおもわれる。G2~G4までのびるが、さらに西に設定したG6では確認されず、南へわかれている可能性が強い。また形状の違う2本の溝が平行して存在するものであろう。

基本土層は、耕作土下では礫層、砂疊層、含疊層が交互に堆積していた。ほとんどのグリッドでは地表下130~150cmまでそれらが互層をなし、その下は人頭大の礫が混入した層に変化しており、特にC区西、D、J、K、L、N区では顕著であった。またB、E、F、G、I区では人頭大の礫は認められず、指頭大~挙大の礫層が堆積し

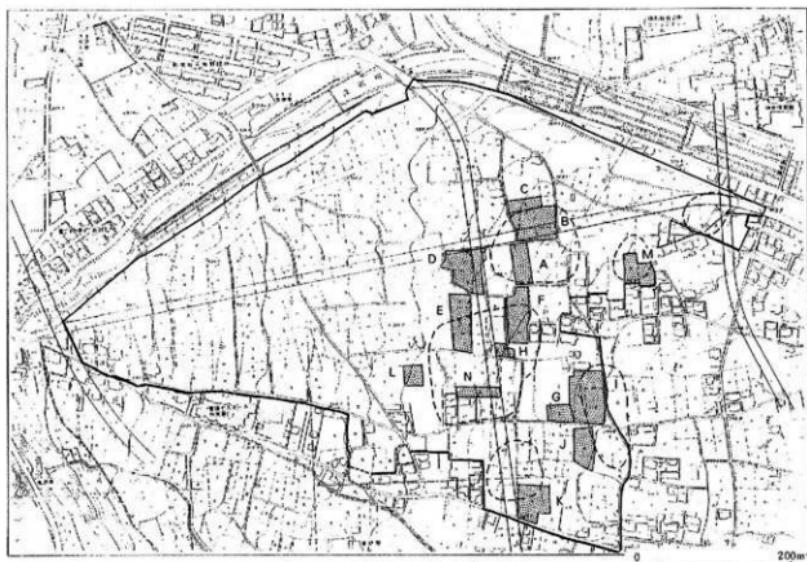
ていた。A、C区東、E区南、F区、I区、K区北、M区南では、地表下50~90cmで礫の混入が僅しか認められない茶~明褐色土が堆積し、部分的ではあるが50cm以上の厚みを持つ部分も確認できた。おそらく、レーダー調査での平坦面は、この反応であろう。遺物の大部分は、この茶~明褐色土の上層となる含礫層から出土している。



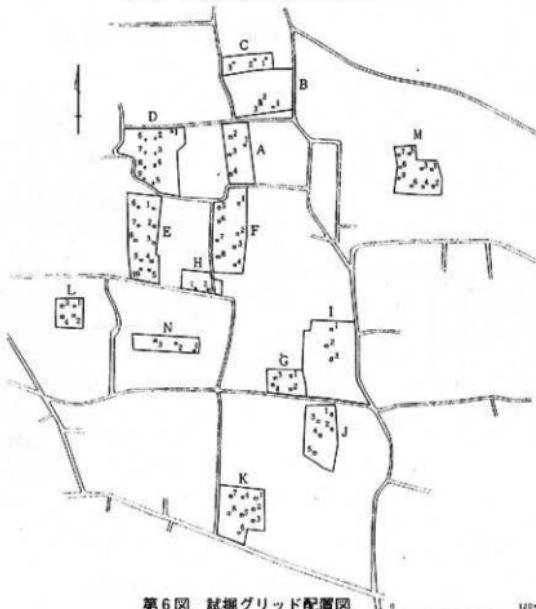
第3図 主要レーダー測線配置図



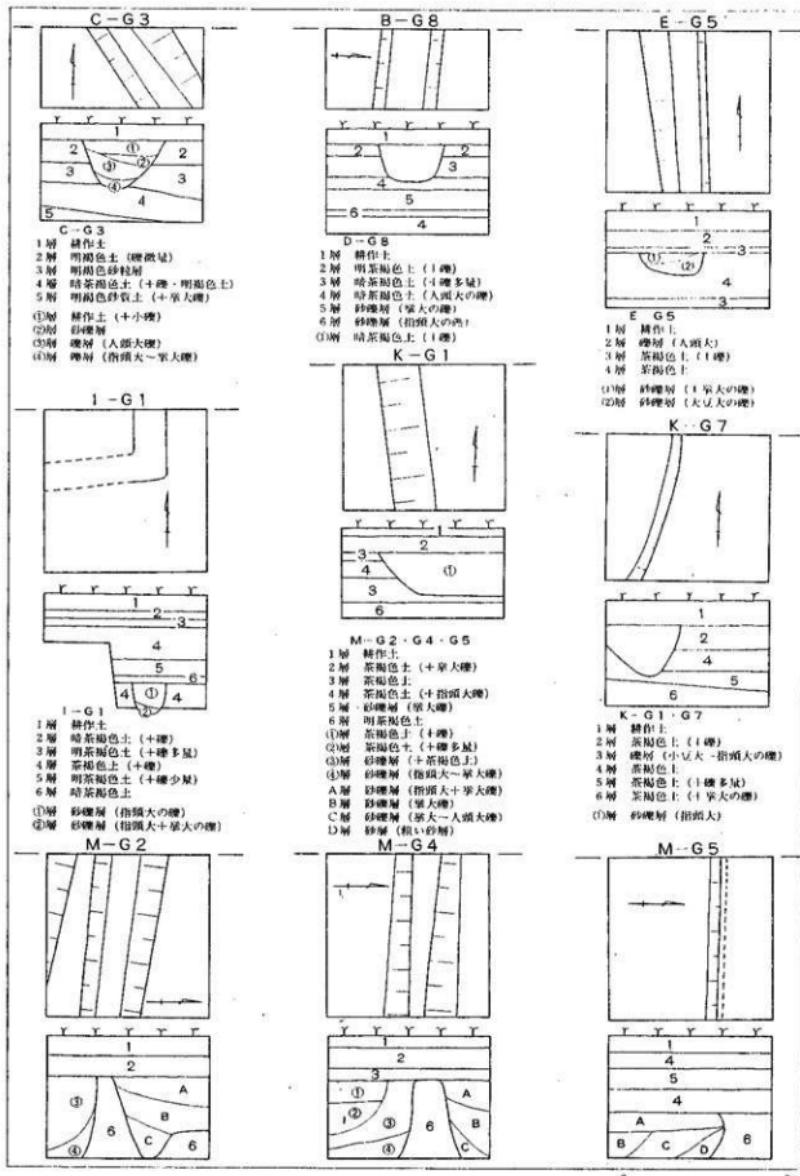
第4図 レーダー調査結果図



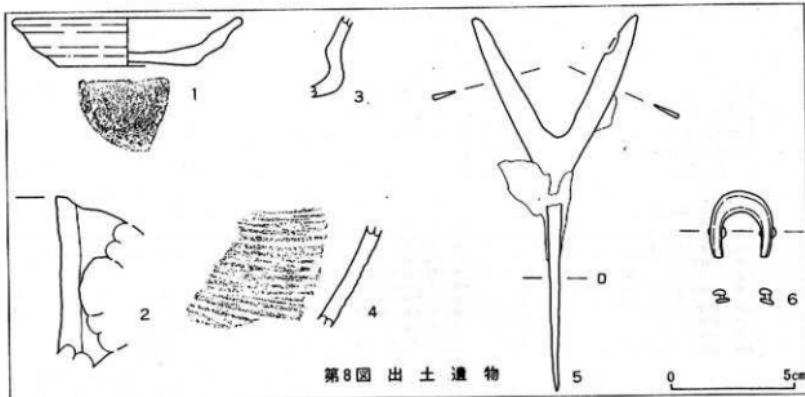
第5図 遺跡地形図及び試掘状況図



第6図 試掘グリッド配置図



第7図 主要グリッド平面及び土層断面概念図



第8図 出土遺物

3. 出土遺物（第8図）

全般的に遺物は少なく、また図示したるものも僅かであった。

1は黒褐色を呈するかわらけである。体部に段を持ち、底部に回転糸切り痕が残る。胎土は緻密で焼成は良好である。K区-G6出土。2は外耳土器の一種で、淡褐色を呈する。胎土、焼成共に良好で、内外面に指頭圧痕が残る。M区-G4出土。3は口縁部に段を持つ土器で、赤褐色を呈する。胎土は長石を含み密、焼成は良好である。K区-G2出土。4は横位の条痕をもつ壺の胴部で、淡茶褐色を呈する。胎土・焼成共に良好である。K区-G8出土。5は雁股鐵で根部長5.5cm、同厚さ3mm、茎部長8cmである。M区-G9出土。6は銀製の飾金具である。馬蹄形をなし、取付部には鉄錆が付着する。I区-G1出土。K区の遺物は地表下50~60cm、他はすべて同80~90cmから出土している。

IVまとめ（第7図）

今回の調査は、遺跡の有無、規模、内容等を把握するために実施したものである。調査はレーダー測線4.2km、試掘グリッドは80ヶ所と事業予定地のごく一部分であったが、数ヶ所で若干の遺構・遺物が確認出来た。

事業予定地東端に近いM区南部からは、東西に延びる溝状の遺構が検出された。遺跡の主体部はM区のさらに南へ延長する可能性が強い。I区からも90°に屈曲する比較的小規模な溝状遺構が確認された。周囲の試掘グリッドの状況から、北あるいは東（予定区外）へ延びるものであろう。K区では耕作土下から掘り込まれた2本の溝を検出した。遺構となりうるか判断に迷うが、レーダー調査の所見と重複するところであり、検討を要しよう。どの遺構も時期を判断しうる遺物はえられなかつたが、M区からは中世の所産と考えられる雁股鐵の完形品が、I区からは飾金具の完形品が出土している。全般的に中世のある時期に營まれた遺跡である可能性が高い。

以上のごとく、3ヶ所で遺構の存在を確認する事ができたが、その範囲・内容は充分には把握されておらず、事業の実施にあたっては、なお慎重な配慮と適切な処置が必要となろう。

引用・参考文献

1. 柳形町教育委員会 1990 柳形町文化財調査報告No 8 「町内遺跡詳細分布調査報告書」
2. 柳形町教育委員会 1989 柳形町文化財調査報告No 9 「大畠遺跡」
3. 雄山閣 昭和43年 大日本地誌大系「甲斐国志」 柳形町誌刊行委員会 昭和47年「柳形町誌」
4. 小笠原長清公資料検討委員会 平成3年「小笠原長清公資料集」
5. 註2に同

